

広報

# 二科

2020年10月 創刊号

## 座談会二科

田中 良  
菅原 二郎  
塙 珠世

谷口 貞久  
茶谷 弥宏  
藤沢 恵  
餅原 宣久  
山岡 明日香  
山下 かじん  
阿部 昌義 (進行)

100年を超えて向かう先は  
新しいページを作る

# 新しい仲間

国立新美術館

六本木で輝くためには！

中原史雄

制作のヒント・・・

島田紘一 呂

私たちが伝えたいこと

広報

# 二科

題字 田中 良 公益社団法人二科会理事長

広報二科 創刊にあたり……  
何とも窮屈なコロナ禍です。

二科会としてもこの状況を深刻に捉えつつ、しかしポジティブに考えるよう努めて、今だから出来る改革に大胆に着手していきま  
す。より魅力ある二科会にするために。

さて、第105回展に向けて制作に励んできた  
皆さんにとって、展覧会の延期は戸惑いと共  
に、制作意欲を減退させるものでしょう。

そこで今年の活動を考えた時、デジタル化  
した発表や、リモートだけに頼ることなく、  
アナログの良さとして広報誌を取り入れまし  
た。いまさら……と言われることもあると思  
いますが、出品し続けている皆様、新しく出  
品しようと思っっている皆様に向けたメッセ  
ージを送ろうと決めました。

出品者へのアドバイスを念頭に置きながら、  
自分の制作コンセプト、テーマ、表現、技法  
などについて文章を散らばせ、何が届けられ  
るのか……色々なことを文章の中から感じて  
いただければ幸いです。

公益社団法人二科会

## 広報二科……目次

■座談会・二科	田中 良	2
■国立新美術館で輝くには	中原史雄	10
■彫刻講座・制作にプラスになる知識	島田紘一 氏 工房探訪「アトリエきうち」 二ノ宮裕子	12
■二科展絵画部・彫刻部	新出品規約について・絵画部Q&A 彫刻部に出品しようと考えている方へ	15
■巡回展について	西 健吉	17
■二科会の義援活動	登坂秀雄 須田美紀子	20
■二科105年の歴史と 日本近現代美術史を彩る作家たち		24
■二科会本部・支部、搬入取扱業者一覧		24
■私たちが伝えたいこと	理事からのメッセージ	
	中原史雄	10
	吉野 毅	14
	生方純一	14
	菅原二郎	14
	西 健吉	15
	尾崎 功	16
	横前秀幸	16
	田浦哲也	16
	木戸征郎	17
	塙 珠世	19



# 座談会・二科

リモート◆◆◆ 新宿、埼玉、石川、滋賀、奈良、長崎、鹿児島を繋いで・・・  
田中良理事長・菅原二郎広報担当常務理事・埴珠世新理事兼事務局長・《進行》阿部昌義広報担当彫  
谷口貞久(絵)・茶谷弥宏(絵)・餅原宣久(絵)・山岡明日香(絵)・山下かじん(絵)・藤沢恵(彫)

コロナ禍で遠方の方が一つの場所に集まりにくい世の中になり、Zoom、Teamsなど、ビデオ会議システムを使用したりリモートワーク、リモート授業などが一つの様式として急速に普及しました。二科会としてもこの状況下、WEB会議の必要性に迫られてきました。そこで、理事長自らの提案によるリモートでの座談会を行い、二科という文字から思うことを中心に忌憚のない意見の交換、提案を直接お聞きしたいと、令和2年9月6日、新宿、埼玉、石川、滋賀、奈良、長崎、鹿児島を繋いで、Zoomリモート会議システムを利用し開催しました。

進行 阿部昌義彫刻部会員(以下進行) ◆  
皆さん、お忙しいところお時間をいただき、ありがとうございます。この座談会は、次代を担う二科会の会員の生の声を座談会形式で広報誌に掲載したいと田中理事長が企画されました。本日はよろしくお願ひいたします。では始めさせていただきます。理事長からお一言お願ひいたします。



埴珠世事務局長(以下埴) ◆  
皆さん、こんにちは。今日は来年度開催予定の第105回記念二科展を成功させるために新しい広報活動として小冊子を作ることにしました。その第1コンテンツとして田中理事長がこれからの二科会を背負い、次代を担う二科の会員の皆さんにお集まりいただくことと座談会を企画提案くださいました。150回、200回と次代につなげていくには新しい発想を取り入れながら・・・、しかしコロナ禍で集まっていたのが難しく、リモートでの座談会を開こうとなり、本日で参加いただきました。

菅原二郎常務理事(以下菅原) ◆  
皆さんこんにちは、改めまして菅原です。私はこういうリモート、デジタルな様式は得意な方じゃないのですが、今年から広報担当となりますので、いろいろ学びたいと思っています。分からないことだらけで、皆さんにご迷惑をおかけすることもありますが、よろしくお願ひいたします。



左から 田中良理事長、菅原二郎常務理事、埴珠世事務局長



餅原宣久会員

餅原宣久絵画部会員・鹿児島(以下餅原) ◆  
餅原です。第100回展で会員になりました。二科展への出品は20歳から30数回、40年近くなるところです。今日は、何をしゃべればよいか迷いそうな予感もしますが、皆さんの力で饒舌になるように努力したいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

進行 ◆  
皆さんご存じの明治のご歴々が鹿児島にはいらっしやいます。歴史に名前を残された方々の流れで東郷青児、吉井淳二のお名前のお話を子供のころからたくさん聞いてきました。鹿児島には南日本美術展というコンクールがありまして、年に1作家欧州に留学させてくれる素晴らしい制度があります。私もその制度で留学させていただいたのですが、その美術コンクールを創設したのが海老原喜之助、吉井淳二であり、鹿児島の美術を志す人にとって、吉井淳二というお名前はとても大きな存在です。今はそうでもないのですが、私がまだ子供のころというのは、絵を描いていけば二科へ出品しているという方がたくさんいらっしやって、事あるごとに何っつので二科展というイメージが一段高いところにあると私の中にあり、出品はハードルが高いと思ひていたのですが、鹿児島を離れた大学時代に出品を始めて、今にいたっています。大学は金沢だったのですが、鹿児島に帰ることになったときに、出品をこのままどうしようかな？と思うところがありました。結局出品を続けて、それからずいぶん長い時間をかけて会員にならせていただきました。会員になり審査に携わるようになってから、自分の中の二科のイメージがだいぶ変わってきたように感じています。二科会はずごく幅広いということについては、本日参加の皆さんのお話の中にもあったのですが、その中に山下さんから二科展はケンカを受け止めてくれるというお話がありました。どんなケンカでも受け止めてくれる幅の広さ、そして逆に放っておいてくれる幅の広さがあると私は思ひます。二科展に出品しよ



谷口貞久会員

息巻いています。コロナ禍の影響で二科展は延期となつてしまひ残念に思つた反面、力を蓄える時間をもらつたのだと感じています。現在は立ち上げたばかりの工房兼スタジオの整備と広報活動に動んでいます。

進行 ◆  
皆さん自己紹介ありがとうございました。申し遅れましたが、本日進行を務めさせていただきました彫刻部の阿部昌義と申します。私も会員3年目、まだまだ知らないことが多いのですが、会員になり、お手伝いさせていただきます。本日も不手際あると思ひますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

この座談会の最初のテーマですが、みなさん二科をどう思ひますか？「二科展って・なに？」と質問されたり、いろいろな場所でお話しする機会があると思ひますが、二科、二科会、二科展をどうお話しなさいませうでしょうか？

谷口 ◆  
「文展内に新進作家の二科を作ろうとしたが、時期尚早ということになり在野団体として始まった非常に古い美術団体で、そこから派生した団体も多くあります」と聞かれた場合には説明しています。他の団体と違い入場者も多く、自分の作品を多くの方に見て頂いているのかなという良い点があります。私は奈良に住んでいて関西支部なのですが、大阪市立美術館で展示室の借用期間が通常1週間のところ二科巡回大阪展では2週間貸してもらえており、見ていただく機会の多い団体です。

茶谷 ◆  
谷口さんが言われたように、とても伝統のある展覧会、一般出品者にとっては、ジャンルが幅広いの出品しやすく、自分を表現しやすい展覧会ではないかと考えています。自分もどの展覧会を選ぶかというときに、出しやすいと言えれば語弊があるのですが、二科展にはいろいろな作品が見られるからという理由もあり、受け入れるキャパシティの広さがあります。自分の絵の勉強には、とてもなるのかなと考えています。展覧会の

山下かじん絵画部会員・長崎(以下山下) ◆  
おはようございます。山下かじんと言ひます。長崎です。西の端での長崎ってちょっと独特でして。出島文化だったり平戸文化だったり佐世保って開放された場所です。鳥が多く、いろいろなコミュニティとか価値観がたくさんあるところで、西の端でなのでどうしても東を向いてしまふ、ちょっとだけケンカを売りたいみたいな土地柄でもあります。自分の作品をどっかに発表してぶつけるとなると、二科会ってというのは一番魅力を感じていますが、二科会が一番ケンカを売ってきなさい！って言われているような気がして第86回展から出品するようになりました。今回参加されている山岡明日香さんと一緒に会員になりました。よろしくお願ひいたします。

藤沢 恵彫刻部会員・埼玉(以下藤沢) ◆  
昨年彫刻部の会員に推挙していただいた藤沢恵と申します。今年から二科会の会員としての責務を担うのだと

うかな?と考えている人には歴史的な云々というよりむしろその幅の広さについてお話しすることが多いです。自分がやりたいことをいろんな考えや表現を持つ人と関わりあいながら追究することができると団体だと話すようにしています。

山岡——◆絵を描き続けていると、どこかに発表したいなと思つことがあります。ではどこで発表しようか?ということになった時に、今はいろいろな選択肢があると思います。最近SNSでも発表ができます。オンラインでもあります。個展もできるし、仲間を募ってグループ展もできます。発表は他の人に見てもらえるいい機会だと思います。でも発表とは別に、一人で絵を描いているとどうしても自分の中で悶々としてしまう時があります。制作に迷ったとき、絵を描いている他の人の意見を聞きたいなと思うときがあります。二科展や他の団体展もきつとそうだと思いますが、出品し続けることによって、絵を描いている人と話す機会がたくさんあります。徐々に作品や名前を知り、どのようなことを思つて絵を描いているのかを知り、絵のことを絵を描いている人と話して、自分の中にまた戻ってきて、絵や制作について考えることができる、絵を描き続けている多くの人たちの中で、色々なものがつながっていつて、自分の制作をさらに進めることができる、それが二科展かなと思つています。一人で絵を描き続けることは大変ですが、一人ではないことを新しい出品者や出品し続けている人に伝えたいと思います。



山岡明日香会員

山下——◆かじんです。僕は二科展はカッコイイ!と思つています。何も誰も知らなくて出品したのですが、唯一知っていたのは二科会趣旨で、個性を尊重し流派の如何を問わず新しい価値の創造者は抜擢され待遇されるであろう...あの趣旨はですね、やっぱり惚れてますよ!

また出し始めて知ったこともカッコよくて、九室会とかですね、あの...今の13室ですかね、やり方とかアンダー35の展示とか、あと彫刻とか見るのが大好きで、彫刻と絵画が融合している一階のカッコイイ空間ですね。僕は、二科会がカッコイイなあとと思つています。

藤沢——◆一言で言えば「懐の深い公募展」です。カラーの強い公募団体もありますが、二科展にはあまりそういった風潮がないように思います。ポップでカラフルな作品の隣にアカデミックな等身像、かと思えばコンセプチュアルな作品...と、いい意味で線引きのない空間が魅力だと感じています。一年間かけてつくり上げてきた作品を正面から受け止め、愛情を持って叱咤激励してくれる公募展だと思います。



藤沢恵会員

進行——◆皆さんありがとうございます。いろいろな初出品や会員になったことなど、皆さんの二科会、二科展、二科という言葉から、参加の皆さんが、こういうものだと感じている発言をお聞きになり、田中理事長はどう思われましたでしょうか?

田中——◆そうですね、ちょうど先輩がいるということに刺激になったと思います。皆さんのお話一つ一つにですね、郷土の先輩の影響というもので刺激を受けて二科展に出品しようという気持ちになったと思います。それは、当然のことで、私は戦争に行き、生き残りまして、ちょっと不正確ですが昭和23年頃、北海道に渡りました。僕の少年の時から憧れの土地でありましてね、その広大な知らない土地で住んでみたいということがありました。はじめ画家になろうと思わなかったのですが、絵が子供のころから好きでした。しかし画家になろうとは思わなかったんです。ある村に住んで文房具店で月刊の雑誌に『光』というのがありまして、その表紙がゴッホの「種時く人」だったので、その解説を、今泉篤男さんでしたかね、帰り道の峠の上で読んだときに、非常

した。私は石を彫っているのですが、会員になった年に、理事長が北海道に渡られたように私はイタリアに渡りました。イタリアで思ったこと、現地の若い作家達とギャラリーやいろいろなところで議論してみると、何か日本で感じたことと違う、その違いはいつたい何なのかずつと考えていました。彼らとのディスカッションで出てくる言葉は「一番大事なのはオリジナリティーだ」、「上手い下手ではなくオリジナリティーだ」と...その点を自分に振り返つて考えた時、いつたい「俺のオリジナリティーって何なのだろう」ということを考えました。自分が立脚点として考えていた自分のベースはいつたい何なのかと考えた時、ひょっとしたら大学時代にいるいるな先生方がおっしゃっていた言葉の公約数が自分の基礎になっているのでは、ということに気づきました。最大公約数とオリジナリティーではどちらが強いかというとオリジナリティーの方が強いのです。自分のオリジナリティーのために、自分の出発点を探し求めなければならぬ、ということに気が付いて苦しい時を散々過ごし、ある出発点を自分で見つけました。そのことをベースに制作し、発表活動をし、15年ほどイタリアで生活しました。帰国し二科展に復帰したのですが、帰国にあつて「日本でしかやれないことを見つけ、日本でやらなければならない」、そう思いますが、グループ展を立ち上げ独自開催したり、あるいは、22、23年になるのですが地域を巻き込んで茨城で「雨引きの里と彫刻」という展覧会を起こし今も続いています。そういう外での発表活動の方が二科会の発表機会より多いのです。外の活動の仲間と話しますと「まだ公募展に出しているの?」という言い方をされます。私がつくづく思うのは、オンラインや個展を主にしている作家、もちろん私も数多く個展を行っています。そのような活動をしていく中で何が大切かというと、先輩がいて後輩がいて仲間たちがいる二科会というのがホームベースのような存在なのかと思つていま

す。もちろん、それ以外の発表活動にも仲間はいまいます。ですが、私にとって二科会というのは安心していられる場所のように思います。何かとりとめのない話になりました。

進行——◆田中理事長、菅原先生ありがとうございます。二科会って何?と皆さんからお話をいただけてきましたが、山下さんが二科会趣旨のお話をなさいました。皆さんお読みになったことございますか? 私も



進行・阿部昌義会員

出品当初、図録の最初のページにある趣旨文を読みました。この文は、当時の先達たちの熱い想いの中で生まれた言葉だと思いますが、今の二科会にとっても大切なものではないかと感じております。新しい試みに向かっている姿勢は今も昔も変わりがないはずで、そういう意味で田中理事長が全会員に向けて意見を募るアンケートを出されました。二科会の会員がどう思っているのか何を感じているのか寄せてくださいという直接的な呼びかけは、これからの二科会の新しいページを作るアンケートではないかと感じております。戦後二科会の会員数と今現在の会員数はかなり違います。当時は20数名であったものが現在は240名に迫ろうとしています。かなり大きくなりました。会員数が少なければコミュニケーション、意見を戦わせることも多かつたと思いますが、これだけ大きくなるとなかなか会員同士のコミュニケーションを取りにくくなります。そして、「会員作家」でありませんが、「会員」自らも運営する「一人」だという認識が薄れてしまつていっているように思います。理事長が今でなければならぬと熱い想いで諸問題を解決するべく覚悟で出されたアンケートなのです。本日の皆さんは、次代を担う会員ということで座談会のメンバーに選ばれたと思つています。同年代を含め後輩にもぜひ意見があれば声を出してほしいという理事長の想いを理解していただきたいとお伝えください。申し訳ありません...進行役の話が長

にゴッホという人の作品や人柄に感動しましてね、僕は何で北海道に渡ったのだろう...そこで、初めてどんなことがあつても絵を描くことが僕が一番、将来に向かつても希望であると感じたわけです。そこから、代用教員をやりながら独学で絵を描いたのですがね、知人からここにいたのではだめだから茨城県に戻りなさいと言われてまして、そこで服部正一郎先生にお会いしまして弟子入りして二科展に出品するようになりました。ご承知かもしれませんが、服部正一郎先生は一度も「こうしろ、ああしろ」とは言わないのです。これはいい、これはダメ、批評だけがあつたのです。「自分の仕事は自分で耕せ」ということでした。人の影響を受けて育っていく方もいると思つますが、自分で苦労しながら、あれやこれや試行錯誤しながら、何とか自分の仕事らしきものを作り上げていくというのが服部先生の教えだったので、僕は、そういう先生に教わつたものだから、先生から直接教わつたことはお酒たくさん飲むことしか教わらなかったのです。なので、二科会の酒飲みの三羽鳥だったので、一升瓶くらいすぐ空けてしまいうくらいの酒飲みだったので、そんな話は別として、人の絵をまねしないでゴッホと描いてきました。なので、僕は会員になるのがとても遅かつたのです。二科らしい絵じゃないものだから好きなように描いた絵なのです。今日に至つたわけですけども、幸いに皆さんのご協力をいただいて、理事長にさせていただいたのですが、これからは後継ぎ...二科会を背負つて立つ若者たちをたくさん育てなければいけないということで、理事の皆さんともいつも相談しあつていっているのです。そして、その一つが皆さん参加してくださつた座談会などにつながつてきたのだと思つています。これからは、皆さんのような若い方たちの話を意見をどんどん聞いて、こうだああだと議論し尽くして、二科会の発展のために大いに尽くしたいと思つています。よろしくお願ひします。

進行——◆菅原先生、思われることございますか? 菅原——◆皆さんのお話を伺い、理事長のお話をお聞きして思つたのですが、私も第49回展が初出品の年で

くなりましたが、次のテーマに移らせていただきます。アンケートということで、今回の参加者、山下さんが支部の立場として巡回展にかかわり、本展に向け出品者を育てる意味もある中でチャレンジャー的な意見を出されました。山下さんお話しただけですすでしょうか?

山下——◆わかりました、では話しますね...メンバーに選ばれて事務局長から参加の打診をいただいたときに「本音でしか話さないで」とおっしゃつたので、これから話すことは、本当にずつと思つていたことでもありません。普段僕は高校生と一緒にいるので、今の子供たちを見て思うことも併せて話します。このコロナ禍で地方の在り方、生き方ってどんどん変わってくるし、地方が元気になる日本が元気になるのかなあと。正直、20代、30代の連中、公募団体展に興味持っていないです。コンクールが個展ぐらいですかね...今の子供たちは発表する意識はもつと早く、私の娘がまだ13、14歳なのですが、自分でデザイン、イラスト描いてTwitterにアップして500人くらいフォロワーがいます。SNSを使って作品を発表するという時代なので、僕は、ちょっとおかしなと思つたのは、巡回展が本展の後に地方に回ってくるのです。それだと、年に一回しかケンカが打てないというのは、ちょっと期間が長いかなあと...というのがあり、半年に一回ぐらいケンカが打てる場所があつても良いのかなと...あと支部展の在り方って各県で運営的に支部単独でやれることってなかなかなくて、都道府県の県



山下かじん会員

境をボーダレスにしていかないかんかな?と思つてたりしています。巡回展やるならば、福岡、鹿児島、九州で二か所もやる必要があるのかと思つていました。支部展も長崎、熊本合同でやりましょうと、他県の魅力的な支部と合同で開催すれば、さらに熱が生まれたいだろうかと思つてみるのですが、そのようなこと考えてましたら、9月の1〜2週目が二科展の会期なので、半年後の3月の1週目に全国で二科コンクールみたいなものできないかな? 支部展、巡回展の流れを見直してコンクールを行う、賞金が高ければ絶対出品者は出してくると思いません。僕は、パリ賞が欲しくて二科展出してましたし、僕が提案したのは、支部展とか巡回展の在り方を見直し、本展とコンクールの二本立て、3月に二科コンクール九州2025とかです。支部展の大きなところは、コンクールにして良いぐらいの規模で行っていると思つたのです。春季二科展を全国コンクールとし、全国で二科地域コンクールを行い、各地の二科コンクールの上位者が春季二科コンクール展に出品すると、賞金20万、30万、二本ずつぐらい一人1点で真剣勝負するようにすれば、高校生、大学生からも出品するのではないかなと思つています。地方の大学生も出品する場所がないのが現状です。二科会として若いアーティストを目指す年齢層や50歳以上の人が作家を目指す後押し的なものを公益な仕掛けすると面白いのかな? 春季二科コンクールの半年後に秋の本展でも賞も厚めに二科賞の権利として銀座で個展とか。もう一つ大きな賞を作つて50歳以上を対象に50歳からの二科デビュー!作家デビュー!とか、賞金を高めに出品者を増やす。一人2点ぐらいで勝負できないかと思つています。入選は展示として上下2点ずつ、落選者が増えても半年後に二科地域コンクールがきて高校美術展の出品作も県展出品作も含め可として、春の春季二科全国コンクールを開催する。二科が面白いこと始めたぞーと、現在100万、200万のコンクールありますが、それとは違い、もう少しいろんな意味で手軽に1点2点で勝負して秋の本展が頂点になればと思つています。巡回展の現状は、秋の本展が終わる、福



岡に巡回が来ても集客が少ない、身内がほとんど、会員活動としては参加させていたと思います。二科会の意識として本展に上つていき高めていく、そのような仕掛けは20〜30代を取り込むコンクールしかないかな? 塙事務局長のアドバイスで、会員になり思っていることを具体的に含めて話させていただきました。会員になり2年なので分かってきてはいるのですが、運営の大変さしかり、合議的に運営していくやり方も、長崎、九州の端っこの考え方はなく、ずっと培われてきた支部展、支部の歴史もあるので、先生方が個人というか少しずつ根を広げてきたのをちょっとだけ馬鹿にしたような感じに取られるかもしれないですが、正直若い作家の考え方は、すごいスピードで動いています。それを手軽なネットで発表させちゃうのではなく、大きな展示空間にアナログでしっかり発表してもらおう。現状の巡回展を見直しエリアを5か所ぐらいに絞つてアナログな展覧会の凄さみたいなのを地方から集積して本展に集まる大きな力として向かつていけないか? みたいなことを思っています。お聞きくださりありがとうございました。

**進行** ◆今の時代にあつた公募の仕方が必要かもしれませんね。二科会が、今の世の中に問われているのかどうか若い方に仕掛ける運営者としての考え方も大切だと思います。それと、二科会の歴史としては、支部展の一進一退の歴史があります。二科会にとつて支部での育成から本展に向けた準備する姿は、着実に出品者を育てるシステムとしてあります。今、時代は変わつた組織に属さず出品しようとするのが公募情報を得る手段としては、ポスターなどを見てホームページよりダウンロードするしかない。私が学生の頃は、縦に長く三つ折りぐらいの絵画・彫刻共通の出品要綱応募票がギヤラリーや美術館に重ねておいてありました。今はあまり見かけませんが…。新しい出品者を募るためには、新しい出品者を待つだけではなく改革は必要なのかなと思います。地域の育成という点では鹿児島は餅原さんがお話しされた南日本美術展は、吉井先生がいらしたころは着実に出品者を伸ばされていたと思います。その点に関して餅原さんいかがでしょうか?

**餅原** ◆南日本美術展の話が先ほどから出ているのですが、この展覧会が必ずしも二科への出品と直結しているということではありません。鹿児島で美術作品を制作している方が立場にかかわらず南日本美術展に出品するという認識です。ほかの団体の方からも多くの受賞者がいますし、無所属の方も出品します。その中から二科展を目指そうという人も出てくる。この展覧会を作られたお一人が吉井淳二先生なので、ご存命のところはそういう二科への流れを今より強く感じたかもしれません。どのような主義主張があつても、身近に自分の力をすべてぶつける場としての展覧会(コンクール)があるということとは、鹿児島は恵まれているのかなと思つています。そのような形に山下さんが提案されたことが重なつてくるとい

ので強制力はなく希望者を募る形にしました。それでもほとんどの支部員に出品して頂けたのは自分たちの北陸支部だという気持ちがあるからで、お互いの気持ちをこれからも大事にしていくべきだと感じています。**谷口** ◆そうですね、大阪の巡回展は会員全ての巡回作品と関西支部の会友・一般の作品を展示しています。関西支部というのは元々4つの府県(大阪、奈良、和歌山、兵庫)が集まっているので、閉鎖的な感覚もなく、巡回展としましても全ての巡回会員と支部出身者の作品が展示されていたので、それが普通なのかな?と会員になるまでは思つていたのですが、会場の関係で少数しか展示されていない巡回展があるというのを知り驚きました。支部展の関西二科展は関西支部4府県と京滋支部2府県(京都、滋賀)で行っていますが、京都市美術館が改修工事中でしたのでしばらく行っていませんでした。今後の支部展の在り方として、山下がじんさんのご提案、コンクールで賞金目当てに出品するというのは魅力があり、若い人たちを引き付けるその考え方は面白いと思います。また、本展での高齢者の出品方法で何か良いやり方がないものかと思つておりますが、名案が浮かばない状態です。一つには、3点とか6点とかたくさん描くのがしんどいと言われる高齢者の方がおられるので、多く描くのではなく1点で勝負できるカテゴリーがあつた方が高齢者の出品を促すには沿つのかなと思つています。**山岡** ◆京都・滋賀での合同で、毎年京滋支部展が開催されています。展示会場はそれほど広くないですが、9月の本展に向けた勉強の場として展示を行い、自分の絵を客観的に見つめなおし、他の方の意見を聞ける場となっております。巡回展は例年11〜12月頃に京都市美術館で行つていましたが、改修工事が始まり3年間は別館の方で展示をしていました。工事が始まる前は、美術館の同じフロアで同時期に独立と一緒に展示されていて、二科とはまた違った雰囲気のある絵を、自分の絵が展示されているすぐそばで見ることができてとてもよかつたなと思つています。巡回展で回ってくる全ての絵の展示はスペース的に難しく、京滋支部に所属されている方の作品や受賞

つの役目として地方組織で作家を育成して本展に導くこともありますが、餅原さんが先にお話しくださいました南日本美術展は、二科会の吉井淳二初代理事長が海老原喜之助氏とともに立ち上げた美術展、作家自身が次代の作家育成を目指し立ち上げた美術展のように思います。当時は吉井先生がいらしたことで二科展へ出品するきっかけにもなつた展覧会だと思つたのですが、山下さんの言われるようにその時代に合った仕掛けが必要なのかもしれないと思つたところです。山下さんが巡回展の在り方にも言及されてきました。現在の巡回展という確かに開催地により規模がばらばらで、中には巡回移動させた作品が展示しきれないという開催地もあるようです。彫刻部に至つては本展の作品は開催地に所属されている方と巡回展用の小品しか展示しておりません。あまりにも本展との違いにこれが二科展の彫刻なのか?巡回展で良いのかという声もあります。実際に巡回展に携わられている茶谷さんいかがでしょうか?

**茶谷** ◆北陸支部では、運営委員会が今後の活動について意見を交換しています。今までは巡回展がなければ年1回、あれば2回の委員会でしたが、動議があればその都度集まっています。洋画を取り巻く環境が年々厳しくなる中で運営委員の意見は大切にしていきたいです。前年度は支部画集の発刊と販売方法や価格について、福井県での北陸支部展開催の可能性とメリット・デメリットについて議論を重ねました。利害関係やメリット・デメリットについてきちんと話し合うことで、お互い支部のために協力していかうとする方向性が生まれるのだと感じています。今年はコロナ禍で支部展や会議ができないう状況です。金沢市のネット配信事業で支部展出品予定作品の紹介を支部長が企画しました。会議をしていない



茶谷弥宏会員

いのかなと思つています。また支部という単位は、県、隣県単位ではなくもう少し広い枠の方が良いのかなと思つています。鹿児島島の巡回展は吉井先生がいらしたこともあり続けているとは思つたのですが、鹿児島で毎年巡回展のある団体の減少や外部の後援も縮小状況で、支部として巡回展を支えるということに大変苦労しているところもあります。継続していくためには早急に解決しなければならぬことを具体化し、考えていく必要があることは多いと私は感じています。

**進行** ◆ここで、塙事務局長から今回参加された山岡さんが関心を持たれた社会貢献、義援活動についてお話しただければと思つています。

**塙** ◆塙です。山岡さんが質問、ご意見くださった二科会の社会貢献についてお話しします。少しお時間下さい。2011年「3・11東日本大震災」の惨状が報道で流れ心を痛めておりました翌月の4月の理事会で、私たち二科会は公益社団法人の美術団体として何かできるかが話し合われました。美術を通しての社会貢献を考え、すぐに義援活動チームが発足し、7月に被災した福島の小学校で2日間にわたり絵画教室を行いました。普段は画用紙1枚の大きさで描いている子供たちに、「体育館を使つて大きな絵を描こう!」、そしてその絵を「9月の国立新美術館に展示しよう!」と。実際に体育館で描いている所を2日目の午前中にNHK福島が取材に訪れ、お昼のニュースで流れました。二科会の先生に絵を教わり、描いたこともない大きなキャンバスに描く:そしてテレビのニュースに取り上げられる。教室で皆そろつて視聴し、大きな歓声と子供たちの笑顔があふれました。そして約束通り9月の本展で国立新美術館の大きな会場、高い天井の空間に展示となりました。この義援活動は毎年のように福島、宮城、熊本、福島と続けられ、多くの子供たちが描いた作品が二科展会場に展示されました。子供たち、保護者、教諭の皆さんがバスをチャーターして被災地から絵を親に來られたこともあり、美術を通して子供たちの表情が明るくなり、共同制作をする

楽しみ、大きな絵を描いたという達成感の喜びを目の当たりにし、二科会ならではの社会貢献ができる素晴らしい事を実現しました。社会貢献義援活動に続いて、東北の復興を願った「起き上がりこぼしプロジェクト」、平和を願った「キッズゲルニカ」と裾野は広がり、本展の展示の一つとなっています。公益社団法人の社会貢献、義援活動は、次の世代に向けての種まきになると信じています。進行——◆前回展担当の菅原先生いかがでしょうか？菅原——◆会員の負担や経済的なことを含め、まず実情を知ることが急務だと思い、巡回展、支部展の調査を始め、関係の役員からのアンケートを募りました。これは引き続き巡回展担当の理事の方が進めていただきたいと思いますが、このまま現状の実施を考えると、巡回展というより二科会の事業をどのように改革すべきか、山下さんが発言したようなドラステックに方法を変える、また、若年層の出品意欲を引き出すには？など本展以外の事業に新たな意味：役割を持たせることが必要とされています。先ほどもお話ししましたが、まず現場の状況を本部として知り、支部、地域の現状を考えたように改革すべきか？私は担当として現行の巡回展を間違いない実施することで精一杯でしたので、二科展の展覧会という事業は二科会の根本です。二科会を考えるように選挙制度改革委員会などが立ち上がる予定です。委員会だけでなく、当然会員は作品を制作し出品する者であり

ますが、それと同じく理事長が話された運営という意識も大切だと感じています。二科展に出品したい、と思えるような二科会にするのは、本日参加された皆さんをはじめ、次代を支える年代だと私は思っています。大いに議論に参加してください。デジタルにもすぐ順応できる皆さんだと思います。ご意見はメールなど本部事務局までお寄せください。進行——◆田中理事長、皆さんのお話を聞いてご発言いただけますでしょうか？田中——◆本日は、率直なご意見ありがとうございました。非常に興味深く、皆さんのお話を伺いました。各支部の実状的なものを聞かせていただきました。支部展というものと、巡回展というものの競合は会場の制約もあって難しいところがありますね。巡回展の在り方、形も考えなければならぬと感じますね。各支部の運営に際しても大変苦労されているのは、今お聞きしますといくつかありましたね。これは時代とともに出てくる当然の問題だと思えますけれども、支部展の在り方、形は今年始まる委員会で話し合わなければいけません。そして声が届きにくい方もいるでしょう。文章でも構いませんので寄せていただきたいと思えます。このままでは、問題点が大きくなりすぎると思えます。皆さんのお話を痛感いたしました。二科展が大きくなっているのですが、さらに発展するためにも自分たちが運営するんだと思って頑張ってください。

進行——◆本日はお忙しい中、田中理事長、菅原先生、事務局局長、ご参加の皆様、不慣れたZoomミーティングシステムを利用しましたので、電波の乱れなどありました。遠距離でもお顔を合わせて話すことができる良い機会、経験だったと思います。今後も積極的に話され、繋がっていかれるように思います。\*\*\*\*\*残念ながら時間となり終了。座談会参加者から出品者、仲間にお声掛けの言葉をいただきました。谷口——◆入選間もない人や、二科に興味を持っていただいている人にお話ししたいと思えます。私が一般出品者の時、どうしてもやりたい制作があり、その作品が二科に受け入れてもらえなければ今後二科に出品しない覚悟で会員の方にご相談したところ、「とてもいいことじゃないですか。おおいにやってください」と言われまして。結果的には受け入れてもらえ今の私があるのですが、出品規約内の平面作品であれば、どんな技法や手法の作品でも受け入れてもらえます。自分自身のやりたい表現方法で制作してもらいたいと思っています。



【お出かけ】F130 茶谷弥宏



【交点の脈】H230×W150×D90 藤沢 恵



「クイーム時感191里」S120 餅原真久



「LOTOWA POND」E160 山岡明日香



「Sign」E200 田中久太郎



「マニエール グラヴール」183×275 谷口真久

茶谷——◆僕自身も以前から感じていたことですが、洋画を志望する人が減り続けている現状を認識しました。出身の金沢美大絵画専攻油絵ですら3割にすぎないので。優秀だった僕の教え子も違う方面に行きました。すでに油彩は古典コンテンツなのですね。それでも二科に出品する子もいるわけで、どのように裾野を広げ作品の価値を高めていくかが自分の課題のように感じました。僕の恩師である増田孝先生からは「二科へ出せとは言われたことがなく、他団体へ出品する作品を見てもらっていた学生時代でしたが、就職してから「今、絵をやめてしまえば一生描かないだろう」と説諭されて出した記憶があります。そのときは落選してしまいました。支部に誘われ、続けてみようと思いましたが、やはり団体に魅力があれば自然に人は集まります。絵で食べていくのは難しく、インスタレーションと違い制作には時間もお金もかかります。そのような中で裾野を広げるにはスーパースターの出現に期待するか、学生を啓蒙するしかないかなと思います。個人的には人生を豊かにするために活動しているのでも野心はないのですが、今後の二科会のあり方を考えさせられるよい機会になりました。昔よりも出品者数が減り、今は格段に入選・入賞率が高いですが、それだけチャンスが増えたということ。前向きにとらえてほしいです。またこれを機会に新人を勧誘してください。みなさんのやる気が周囲に伝わり出品者を増やし会の発展につながります。

部だと思おうので、ぜひ検討していただきたいです。私のような会員になったばかりで右も左も分からない輩がおこましいのですが、これから出品される方や一般・会友の方に向けてメッセージを送るとするならば、「素材や分野の垣根を越えて交流し、二科展を乗算的に発展させていきましょう！」と言いたいです。地味な石彫作家である私が会員になったのは、金属の作家と出会い、石と真鍮による作品をつくり始めたからです。写真もデザインも勉強して作品に取り入れたいという欲望を抱えています。公募展の強みはジャンルの幅の広さです。横断的に交流できたらどんなに作品が豊かになるだろうと想像して嬉しくなります。相乗効果で高め合えるプロ集団！二科会！そのメンバーを募集しています。餅原——◆2020年の二科展がコロナ禍の影響で延期になったことは確かに残念なことでした。でもここで一度立ち止まったことで、それぞれが個人の立場で二科会について、それに向き合う自分の制作について、様々な振り返りたり、じっくり考えたりする時間ができたのではないかなと思います。そこで次に第105回二科展を再開するタイミングがとても大事ではないかと私は考えています。「久しぶり〜」と前回までの続きをいつの間にか始めるのでは、延期されたことで生まれた時間が流されてしまうことになりそうです。これまで次に次々と時間が進む中、なんとなく気になりながらそのままになってしまっていたことをクリアにする場面をつくるチャンスであるのかもしれないですね。少し時間をとるかもしれないですが、次の機会にそのような場面があるといいなと今回の座談会に参加して思いました。団体展離れが進む現況にありますが、団体展にはコンクールにない良さもあります。「二科会趣旨」に改めて目を向け、それを大勢の仲間たちと継続的に求めていくことができる二科会の良さをこれから出品者にアピールしたいと思えます。様々な価値をそれぞれが自由に求めているのにもかわらず、まとまってひとつの団体にいられる展覧会は他にそうありません。そのような中、まずは自分の作品なのでしょう。山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

ありますが、それでもなんとか描き続けることは出来ると思えます。ですが絵を描き続けることは人とのつながりが無いと難しいと思えます。私は、家族や友人や先生、多くの方に励まし引っぱり張ってもらって、絵を描き続けています。二科展には全国にいる絵を描いている人達に出会える機会があつて、自分の世界を広げることが出来る場だと思えます。今回の座談会でも遠方の方とこうして話す機会があり、絵を描いたり、彫刻を作ったりと、制作している人とながることが出来ました。人の作品に触れ、人と話すことは、より自分の輪郭をはっきりさせ、自分のことを深く知ることが出来ると思えます。新しい出品者や出品し続けている人が、二科展に出品することで、より深くより豊かに絵画人生を謳歌されるいいなと思っています。《二科会趣旨》 ※第99回展図録まで冒頭に掲載

藤沢——◆座談会に参加して絵画部の先生方のご意見を聞けたことは、私にとつても貴重な体験でした。動画配信やSNSでの発信など、新規出品者に向けてのアピールとして不可欠だというご意見がありました。私も大賛成です。次世代に対しての発信は、パソコンよりも断然スマートフォン向けで行う方が有利です。また、時間内に発言できなかったのですが、作品のコンセプトもキャプションやホームページに載せてほしいという願望があります。作家によっては「作品の良さは作品が語る！」と考える方もいらっしゃると思うのですが、コンセプトが分からないと真の価値を理解してもらえない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。言葉も作品の一

山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

山岡——◆絵を描いていると一人で孤独に感じるこ

国立新美術館講堂  
令和2年10月23日開催報告！

# 講演とワークショップ



作品にインパクトを与えるヒントは・・・

自分らしい作品が思うように描けないのは才能ではなく意識の持ち方である

今年の二科展が来年に延期になり、各地での巡回展も出来なくなっています。夏に向けて制作に励んできた皆様は意欲を削がれたこととお察しします。

そこで、二科会は第105回記念二科展に向けての講座を開催いたしました。一人一人が今の状況をポジティブに捉え、自作のステップアップしてほしいと思います。

何度も出品しているが「自分の作品を客観的に見てどうなのだろうか」「画面に心の世界を精一杯描き出したいが、今一つ思うように表現できない」など創作の尽きない悩みと向き合いながらの制作です。国立新美術館で開かれる二科展会場には、毎年約1300点の絵画が展示されています。その中で、自分らしい作品を描いて存在感を示す。長年、二科展に出品してきた経験を通して、壁面で輝くのは決して才能ではなく、一人一人の意識の持ち方だという信念のもと、そのハウツーを具体的にアドバイスしました。



多数のご応募ありがとうございました。ご好評いただき次回を待ち望む声に応じて第2弾も開催予定です。



色の混色について語る

## 絵に想うこと

絵画部常務理事 中原史雄

常々、明るさのある絵を描こうと思っている。絵画の表現は自らの心の聲（ひだ）を具現化するものだから、暗い気持ちの時もあるが、その感情を咀嚼して、明るく描こうと思う。アンリ・マティスが「私は肘掛け椅子のような絵を描きたい」と言っているように。

私のテーマは、日常の周辺から見えてきたもの、感じたものを画面に表す、いわば私的情景と言える。キャンバスに向かう前に、私の中で膨らんできている色と形のリズムがあつて、その調和を崩さぬように、人物や風景などの要素を埋め込むことになる。

ある朝、キラキラと輝く若葉に見惚れていたら、緑と緑の境界が赤く見えた（老眼鏡を忘れていた）。その体験がヒントになって、赤い線を描き、両側から緑色で攻める色彩効果にすっかりハマっている。

描いては消すことを繰り返して、東洋と西洋の接点を探り続けた須田国太郎は「油絵の正道に立って日本人自身のパレットを見出し、技術を作ること容易ではないが私は可能と信じる」と語っている。この国が培った美の特質に根差した作品づくり。その姿勢に学びながら、画面から見えないものが滲み出てくるような絵を、せめて一枚でも描いてみたい。

アトリエに入ると、使う絵具の混色から始める。主に使うのは、ビリジャン、カドミウムレッド、カドミウムイエロー、レモンの三色とホワイトで、パレット上でよく練る。とくに濁色ほどよく混ぜることが大切。

ビリジャンとカドミウムレッドの補色にホワイトを加えたグレーをよく使うが、混ぜる比率によって色の表情が微妙に変わり、緑にも赤にもよく合って色彩効果抜群。筆は筆触を抑えたいので、軟毛にしては比較的安いホルバインのHシリーズを使っている。オイルはベトロールに溶かした乾燥の早いバンドルで、艶を消すためシリカを絵具に混ぜる。ほか、特別な画材や技術は使わないし、使おうとも思っていない。

さて、あの国立新美術館の広い壁面で、存在感を示すために何が必要か、長年二科展に出品してきた経験から一言。

ひたすら真面目にキャンバスに向き合うだけでなく、ときには横着に構えること。そして、「ダメな点で挑む」「思いっ切り」の良さ。それを身につければ、描くことが10倍楽しくなることと請け合い。

## 工房探訪

アトリエきぎづち

現在のメンバーは5名で、木彫3名、塑造1名、諸材料1名。うち4名が二科展に出品しています（会員3名、一般出品1名）。広さ20平米、天井高4mのスペースを4名で区切らずにシェアしながら制作しています（1名は別棟の倉庫を使用）。毎回全員が揃うとは限らないので、少人数の時は広々と使うことができ、作品全体を眺めたり撮影をしたりするときもこの方式が好都合で、協力し合いながら各自の作品に向き合っています。アトリエは建物の2Fにあり、重量物があげられないことが難点ですが、大家さんに申し1Fの駐車場を一時的に使用することもできるのは大型作品制作にはありがたいことです。

場所は横浜から2駅の高台にあり、遠くみなとみらいのビル群が見渡せます。

彫刻のアトリエを個人で持つことが容易ではない中、駅から徒歩10分で通えるこの「アトリエきぎづち」は、すべてが整っている訳ではありませんが、創作を支えるかけがえのない確かな場所となっています。（彫刻部会員 二ノ宮裕子）



## 彫刻講座

### 制作にプラスになる知識

彫刻部理事 島田紘一郎



夏は、別の考えを持てば、研究、勉強の時間が取れたとも考えられます。絵画、彫刻の会員が持っている自身独自の制作に関する便利情報などを提供して少しでも出品者の参考になればと思います。私の場合は、主に木彫を制作しますので、楠をよく使っています。木材のほとんどは、小田原の製材所から購入しており、そこは、多くの木彫家が出入りしています。年明けには直径60cmから100cmを超えるものまで、原木が40〜50本入荷されます。有料ですが製材、運搬もしてくれます。

木と木を接着する場合、2液の透明の接着剤を使います。パテで埋める必要が出てきたときに、ボンドにおがくずを混ぜて使用する方法を使うことが多いのですが、乾燥に時間がかかるのと体積が減ってしまう

来年の開催に向けて制作中に役に立つことをと思い、私が制作中に知り得たことを制作にプラスになる知識として紹介します。参考にしてください。

- 1 彫り始めてまだ水分が含まれている時、そのままにすると急激に水分が飛び、ひび割れの原因になります。仕事が終わったらビニール袋に包んで次の日まで保存します。この方法を続けていけばゆっくり乾燥してゆき、ひび割れを防げます。またひびが入ってしまった作品は、逆にビニール袋にぬれタオルと一緒に入れておけばふさがります。
- 2 小品の収納箱を段ボールで作ります。タバコ屋さんに頼んで箱を頂いてます。印刷面が内側になるようにカットして箱を作ります。結構丈夫で、特に外国製タバコの段ボールが強いので、積み上げてしまおうとどの作品が何処にあるのか探し出すのが大変になるので、マジックで制作年月日を全面に書き、写真を貼っておきます。濡れても良いように透明の養生テープを貼っておきます。
- 3 木材をカットする時は、木に対して底面を直角に切ることを心がけます。立てて歩かせることがスムーズにできます。切断面は木工用ボンドを塗って被膜を作ります。水分の蒸発を防ぎゆっくり乾燥させるためです。これで切断面からのひび割れを防げます。作品には木目の芯を残さないようにします。芯が残ると後々そこからひびが入る可能性があります。
- 4 ベルトサンダーで研磨しているが新しいうちに切れてしまうことがあります。ザラザラした目を捨てるには惜しく、サンドペーパーと同じなので、再利用し棒ヤスリを作ります。平棒、丸棒、半月棒、三角棒などの木を用意し、サンドペーパーを幅に合わせてカットします。ボンドを塗りひもで縛っておき、乾いたら完成です。
- 5 細いロープや花の茎を製作するとき、曲線があり制作も難しく、木と木を繋ぎますが、自然な流れと接着強度が必要になります。継いだ部分が自立たぬように接着面を斜めにカットし木目を合わせ金属を差し込み接着剤で擦り合わせながら止めます。



# 自分の分身・・・命が吹き込まれた魅力的な 作品を私たちは待っています。

## 二科展新出品規約について・絵画部(第105回記念二科展新規約及びQ&A)

第105回記念二科展出品規約(抜粋)[絵画部]

■会期：2021年9月1日(水)～9月13日(月)[9月7日(火)は休館日]

■会場：国立新美術館(東京都港区六本木7-22-2)

■搬入：8月19日(木)～20日(金)

国立新美術館「地下1階作品搬出入口 二科展受付」

■搬出：9月14日(火)・15日(水)

■作品規約：50号～F100号(S100号は不可)

■出品資格：15才以上、国籍は問いません。

■出品料：2点まで1点につき1万円、3点目からは5千円

\*35才以下は1点目から全て5千円

■授賞：○内閣総理大臣賞

○東京都知事賞

○二科賞

○第105回記念大賞

○パリ賞

○SOMPO美術館賞

○上野の森美術館奨励賞

○特選

○第105回記念賞

○二科新人賞

○新人奨励賞

■授賞式・懇親会：9月1日(水)

■巡回展：東海・大阪・富山・京都・広島・鹿児島・福岡

《開催予定》

### Q■出品規約の変更はありますか？

A■第105回記念二科展(2021年)から新たな変更があります。今までは100号やS80号を出品するためにはF80号までを2点出品することが必要でしたが、1点目より50号～F100号(S100号は不可)まで何点でも出品できるようになりました。今まで最大6点までの上限がありました。F100号までなら1点から何点でも出品できるようになったわけです。しかも出品点数が多い場合、出品料が軽減されます。U35(35歳以下)の出品料割引や会友の方の出品料も同様に変更になっていますので、詳しくは出品規約をご覧ください。

### Q■50号1点出品でも入選しますか？

A■原則として作品本位で点数やサイズの大小の差別なく公平に審査をしますので、審査員(会員)の多くの挙手があれば十分に可能性はあります。ただし出品点数の平均は3～4点です。自分の世界観や作品に対するエネルギーを伝えるには、2点入選を目指し複数出品することをお勧めします。

### Q■入選や落選は誰がどうやって決めるのですか？

A■出品者が1年間かけてエネルギーを注いだ作品を、会員全員が様々な観点から審議しつつ、挙手制度を貫き公正な審査をしています。約3日間かけて作品の質と挙手の数で賞や入落が決まるのです。決定までは1次、2次の最終審査まで挙手の数により厳正中立に決定します。例えば3点出品した場合、まず3点全体の質をみて入選、再考、落選のいずれかを決め、入選が決まると各作品の挙手最多数をもって入選作を決定します。1次審査で挙手数が足りず再考に残った作品も、慎重に審査を重ね挙手により入落を最終決定します。

### Q■2点入選や賞はどうやって決まるのですか？

A■賞審査も一部の審査員の推薦で決めるのではなく、平等に全入選作品から賞候補を挙手で決め、候補作品を2次、3次審査で絞り込み、必要に応じ意見交換もしながら、過去の受賞歴等も鑑み、最終審査も必ず会員全員の投票で決定します。2点入選も同様です。2点入選は候補から展示効果を考え、2点入選にふさわしい作家と作品を選抜します。

二科会の審査は自信をもって公平中立厳正に実施しているといえますので、安心して制作に集中して、すべての出品者にあるチャンスを感じ、チャレンジ精神をもって力作を出品して下さい。

### Q■会員・会友にはどうやって推挙されますか？

A■受賞審査同様、1次審査で候補になった出品者を2次審査で再度挙手により絞り込みます。会員・会友は法人の構成員になるわけですから、定款や審査規約により会員全員審査により推薦された推挙者を最終的に理事会が過去の出品作品、人格、支部での活動状況なども総合的に監査し最終承認します。

### Q■額装なしでも出品できますか？

A■3cm以内の仮縁を必ずつけて下さい(厚み10cm以内)。現代アートでは額なし展示も多いですが、二科では作品保全の観点から額装を原則としています。破損は自己責任になりますのでご注意ください。

### Q■過去に入選した作品に手を加えて再出品できますか？

#### 未発表の定義は？

A■原則として未発表作品で新作での出品に限ります。特に二科展で過去に入選・受賞した作品は出品不可です。加筆・修正して再出品しても新作とは認められない場合があります。春季二科展の選抜出品作も本展には出品できません。二科展以外で審査のあるコンクール等に入選・受賞した作品も未発表とは認められません。ただし各地域の二科支部展に展示・入賞した作品は新作として本展に出品できます。過去に二科展に応募したが入選せず展示されなかった作品は未発表ですが、そのまま再出品は望ましくありません。作品改善をし、全くの同一構図にならないように留意しつつ頑張って新作として出品して下さい。

### Q■インターネット等でみた写真・画像や他の作家の画集などを

#### 参考にして作品を描いてもいい？

A■他者の写真や作品を盗用・借用した作品は規約違反となります。どの程度参考にしたかは大変難しい問題ですが、審査時に作品チェック委員会を作り過去の作品も含めて慎重に監査しています。影響と引用・盗用は別次元です。作家の良識とオリジナリティー溢れる自筆による作品として出品して下さい。会員同様、会友の出品作品も二科会公式HPに掲載されておりますので自己の作品検証や広報にご利用下さい。

### Q■若い人向けの、出品しやすい情報はありますか？

A■二科ではU35(35歳以下)という出品制度があります。出品料が軽減され、U35出品者対象の賞もあります。101回展よりこれからの二科会を見据えて、絵画部のU35出品者を対象に、二科新人賞、新人奨励賞を設けました。これからの二科会を担う大型新人の登場を会員一同切望しています。

### Q■輸送や搬入方法がわからないのですが？

A■搬入を代行してくれる運輸業者があります。基本的にはどの取扱店でもよいのですが、搬入出に慣れている業者がいいと思います。各支部でどこかの業者を推奨しているかは、お手数ですが各支部にお問い合わせしていただければと思います。詳しくは出品規約をご覧ください。出品規約はホームページの「二科会」から検索していただくか、下記の事務局にお問い合わせ下さい。出品アドバイス担当の会員や支部への連絡方法をお教えしますのでお気軽にご相談下さい。

#### お問い合わせ

〒160-0022

東京都新宿区新宿4-3-15 レイフラット新宿501号室

TEL：03-3354-6646 FAX：03-3354-4768

Mail：nika@nika.or.jp

公益社団法人二科会

## 新出品規約について・二科展の彫刻部に出品しようと考えている方へ

第105回記念二科展出品規約(抜粋)[彫刻部]

■会期：2021年9月1日(水)～9月13日(月)[9月7日(火)は休館日]

■会場：国立新美術館(東京都港区六本木7-22-2)

■搬入：8月19日(木)～20日(金)

国立新美術館「地下1階作品搬出入口 二科展受付」

■搬出：9月14日(火)・15日(水)

■作品規約

寸法：高さ(H)3m以内。幅(W)・奥行(D)共に4m以内で、幅(W)

×奥行(D)の面積が4㎡をこえないもの。高さ3m×幅2.5m

×奥行3.5mのエレベーターで運べる大きさと、天井高4m

の所で組立て可能なもの。※野外展示作品は上記以上可

重量：室内は1㎡当たり1.5t 野外は1㎡当たり3t以内

1パーツが3t以内

■出品資格：15才以上、国籍は問いません。

■出品料：1点～2点目迄は1万円、3点目からは5千円

\*35才以下は1点目から全て5千円

■授賞：○文部科学大臣賞

○二科賞

○第105回記念大賞

○ローマ賞

○彫刻の森美術館奨励賞

○特選

○第105回記念賞

※お問い合わせは左記絵画部と同じ公益社団法人二科会事務局まで。



絵画部門審査風景



彫刻部門審査風景

●彫刻部事務担当です。私は、石膏を素材とした作品を制作しています。経験上アドバイスとすれば、人体をモチーフにした立像の足首、指先などは特に注意です。搬入日を逆算、計画し、心は納得のいくところまで作り込みたい、その気持ちがとても大切なのです。しかし、粘土での制作時間が増え石膏取りの作業が押し寄せになり、十分な乾燥時間が取れず強度がなく、ひびが入る例もありました。そして、台座を考えて下さい。制作の中で展示をイメージすることも大切です。台座は作品に合ったものを自分で製作することがベスト。台座は、ある意味作品の一部として見られることもあり、美術館でも貸し台座があります。作品の大きさカタチを考え、単なる置台にならないように出品票にある貸出台座一覧から選んで下さい。当然ですが、床面に直接展示を考える作品ならば台座は必要ありません。そして、作品や台座の底面には必ず養生をすることになっています。ホームセンターにある家具などのフローリング保護用のフェルトシールが便利です。100円均一ショップにも良いものがあります。底面に工夫しご自分で貼ってお持ち下さい。展示に際し不安定なもの、危険なものも受付できません。台座に固定するなど展示方法も考えて制作して下さい。展示を想定することも制作の一過程と考えたいです。また、素材によっては腐敗するもの、虫の混入などの処理が完全でない場合、展示できない場合があります。庭木を切った、そのまま使用の場合、カミキリムシやアリなどが住み着いている場合があるので、気を付けて下さい。

次は搬入方法です。作品が完成して…二科展に出品したいのだけけど…。搬入することは、次に大切なことです。二科展の搬入日は2日間あり、搬入方法は様々です。参考にできればと思いますので以下に記します。

◆個人搬入の場合、①レンタカーや自家用車での搬入、②公共交通機関を使用、2つの方法が考えられます。作品の大きさ、配送費、高速代や燃料代などそれぞれの費用と六本木の国立新美術館までの距離を相対的に考えて選択下さい。積み下ろしはスタッフがお手伝いしますので搬入時受付にお声掛け下さい。

◆業者搬入の場合、③美術専門業者④赤帽⑤単身引越しパック⑥宅配便・ゆうパックがあります。専門業者は、費用は掛かりますが作品梱包も含め安心できます。④⑤⑥の場合、梱包は自己責任になります。作品が破損しないように注意を払うことが大切です。配送受け取りは、指定業者受取先対応になりますので予約が必要です。出品規約をご覧ください。また、上記とは別に運送業者を使った共同搬入も、同じ地域で複数人出品者がいる場合、費用分担でき労力も軽減できます。いずれの場合も直近ではなく余裕をもった予約が必要です。

●彫刻は構想の段階からどのように成立させるかを考え取り組み、命を吹き込む作業です。制作に向かう形のない強い思いから始まり、没入したり冷静になろうとしながら素材と向き合います。それは、苦しくも充実した幸せな時間と私は考えています。作品が手を離れて実際の空間へ責任もって送り出し展示されている期間、アトリエとは違う空間で作品を観る、そこは新たな気付きの宝庫です。自らを成長させます。10万人近い来場者に観ていただく嬉しさ、同じ立場の制作者との出会いは具体的な技法や、悩みなどを解決できる機会でもあり大きな刺激です。そして会期が終わったとき…それは次へのステップとなります！出品に際し、搬入直前や美術館に着いて慌てないように、ご不明な点は二科会事務局までお問い合わせ下さい。彫刻部担当が対応させていただきます。また、ご希望の方には、出品規約、出品票を二科会より送付いたしますので、お気軽にご請求下さい。【彫刻部事務担当】

公益社団法人  
二科会公式ホームページ



## 初出品

彫刻部常務理事 吉野 毅

1968年、旧東京都美術館で開催された第53回二科展が私の初出品である。

当時学生であった我々の間で、公募展が美術運動体として存在理由があるのかどうか問われていた時代でもあった。野外彫刻展が各地で開催されはじめた頃でもある。

大学の用務員室から借りたりヤカーに石膏の人体とブロンズの頭像を乗せ友人に押ししてもらいながら美術館に運んだ。

大学のアトリエとは違つ途轍もない大きな空間には、石、木、金属などの抽象彫刻が所せましと置かれていた。その中に石膏の人体を置いた瞬間の恐怖にも似た緊張感(この緊張感)は形こそちがえその後も続くことになる(は忘れることが出来ない)。

多分実材から発する強い質感に圧倒されてしまったのだと思う。さらに追い打ちをかけるように「どうして着色してこなかったのだ」と先輩の声がかえってきた。一瞬出品を断念すべきかと思つた。躊躇したことが現実となつてしまった。

そのショックは大きく作品を持ち帰りたい衝動にかられた。初出品の苦い思い出である。

石膏は彫刻制作の途中の材料であると言われる。粘土で作つたものを石膏で雌型を起こし、その雌型に離型剤を塗り石膏を流し込み、乾いた所で割り出して、雄型を作る。この一連の作業の主役は石膏である。雄型を修正したものが彫刻の原型となる。

石膏の人体像もブロンズの頭像も実材の抽象彫刻に囲まれて陳列されていた。

ブロンズの頭像に比べ石膏の人体像の存在がやはり弱く感じた。やはり着色すべきだったのかという思いで初入選の感動など全く感じられなかった。しかし自らの作品を客観視することができたという事は大きな収穫だった。

翌年から着色してみたが、むしろ石膏は白いままが一番美しいのではないかと開き直りにも似た気持ちになった。彫刻は素材の魅力をどこまで引き出すことができるのかが、彫刻制作の大きな要素の一つであると感じた瞬間だった。石膏の白に拘ることが彫刻を弱くみせるのであれば、フォルムの密度をあげる以外ないと感じた。

以前大学の後輩に「今、現在公募展に出品する意義はどこにあるのですか？」と問われたことがあった。突然のことで、明確に答えられなかったが、今だったらこう答えるだろう。「公募展の展示会場は、一年間の勉強の成果を見せ合う土俵である」と。

## 二科展 55年生

絵画部常務理事 生方純一

私が初めて二科展に出品したのは第50回展です。以後104回展まで55年間休まず出品し続けてきました。その間には海外にいた時もあり、海外に行く前に描いておいた作品を友人に頼んで出品してもらったことも2度ありました。友人からは入選通知と依頼しておいた絵葉書を送ってもらいました。

初めの頃は100号の作品を木枠から外して、丸めて電車で運び、旧都美館の中庭で組み立て、傷ついた画面を応急的に修正して出品したこともありましたが、同じような出品者も何人かいて、木枠にキャンバスを張るのを何枚も手伝いました。搬入の頃は二十日近辺で、台風などの大雨の時もあり、慌てての作業で歪んだりすることもあり、後日会場で見たら反りかえっている作品もありました。

その頃、私は自分の「後ろ姿」をよく描いていました。何かを捜して彷徨っている、若い日の迷走中の姿です。(迷走は今も続いています)厭世的な青年期で世を拗ねていたのか、遠い道へ歩き出して行く後ろ姿や、都会のビルの上から街を見ている後ろ姿などでした。その頃の作品は母の実家に預けてありますが、今の作品の原点を見るような気がします。

人間はきつと青少年期に感じたものが原風景のように続いていて、その後の体験や環境などで多少の変化はあると思いますが、根は変わらないのではないのでしょうか。若石や流木、風景、人物などをモチーフにしても、やはりその頃の自分が色濃く反映されていると感じます。

私は二科展に出品して55年になりますが、いわゆる師について学んだことは一度もありません。二科展や支部展の批評会などでも、会員など先生のアドバイスを受けたことは一度もありませんでした。二科展に出品し、先輩や同輩と同じ壁面に展示された自身の作品を自分で評価しようとした。誰かの意見ではなく、自ら感じた作品の中から学びました。ですから先輩や同輩の作品からは大きな影響を受けました。

近年は寡黙で普遍的なモチーフとして、若石などを描いてきました。コロナ禍のなか今描いている作品は、年齢とも関係あるのか軸足が少し変わってきました。これからも「時間と空間」「光と影」などと大いに遊びたいと思つています。

会場などでお会いする機会がありましたら、出品経歴の多少にかかわらず、忌憚のないご批評をお願いします。

二科展は私の研究・発表の場であり、卒業の無い学校です。

## 会津、田島の思い出

彫刻部常務理事 菅原二郎

大学4年の春、石彫の先生であった細井良雄先生がご自身の郷里である会津の田島山中に今年の夏、石を彫りに行かないかと私、瀧、佐々木に声をかけてくださった。

ご自分を含め4人で、大きな石を動かすには4人ぐらいが一組となり親方の指揮のもとチルホルルや道板、コ口、番木などを使って思う場所に動かしていく。そういう人数に声を掛けられたのだなと後になって気が付いた。

詳しく聞いてみると農家の物置に寝泊まり、自炊し、道具も毎日フイゴで撃つけ、弁当持参で近くを流れる川から気に入った石を見つけ、必要であれば4人で引つ張り出し、現場で彫るというものであった。当然電動、エアーツールは使用できず、むく撃で手彫りでの制作。

夏までの間、制作のテーマに考えをめぐらし、最終的に手をイメージしたものに落ち着いた。なぜ手かといえば手は様々なものを作り出す。生活していくうえで手のはたす役割は多岐にわたっている。オーバーに言えば人類の歴史を築いてきたのも人々の手だと思ふ。その手を象徴した作品を作りたいと思つた。

大まかなエスキースをいくつか作つたが、川に転がっている石がどんな形かもわからず、大体このようなイメージというところまでで手を置いた。

その夏、車に必要な道具を満載し田島山中のベースになる物置に到着、4人が生活できるよう設置した。翌日から全員で川沿いを石探し、それぞれが思うような石を見つけ、私は川から細井先生指揮のもと全員でチルホルルを使って引つ張り上げ、川沿いの道路わきで制作した。瀧は石の在った川べりで制作していたが、上流で雨が降つたのか、いきなり水位が上がリ、お弁当を流されてしまつ、というエピソードもあった。

ちなみに当時は河川法が無く、川から石を取り出すことは可能であったが、今は禁じられている。

私はこの作品を上野の東京都美術館での第49回二科展に初出品し、特選を受賞することが出来た。瀧もその年の新制作に初出品、新作家賞を受賞した。

私は以後(15年のブランクはあるが)今まで二科展に毎年出品し続けている。この細井さん発想の活動は今でもいうくらいベイトンボジウムだと思ふ。この田島での経験を活かし、その後、瀧達と福島県の黒御影の山や瀬戸内海の北木島の砕石場での制作、というアトリエ外での制作を始めるきっかけとなった。また私のヨーロッパでのシンボジウムへの参加につながるものだと思う。私にはあそこから自分の彫刻家としての道が始まったのではないかと思つている。

## 巡回展について

◎巡回展事業(定款第4条より)

二科美術展覧会終了後、大阪・京都・名古屋・広島・福岡・鹿児島等、地方都市において巡回展を行うことによる全国の芸術活動の推進

◎巡回展の歴史

大正4年(1915)に京都で第2回二科展の巡回展を開催。その後、2019年まで左表の地域で開催されています。

これまで地方都市の巡回展を機に二科展への出品者が生まれ、さらに支部が設立されて地域の美術活動の活性化につながっています。

■平成24年(2012) 公益社団法人二科会に移行

■平成28年(2016) 内閣府から公益社団法人としての

巡回展のあり方の指導を受ける  
それまでは各巡回支部が全てを執行行っていた

◎第105回二科展の巡回展について

○内容 絵画部(会員作品、会友・一般の受賞作品、地元入選者作品)

彫刻部(会員の小作品10点、地元入選者作品)

デザイン部(会員作品、地元入選者作品)

写真部(会員作品、地元入選者作品)

◎巡回展の今後の展望

・地域の特色を生かした魅力ある展示

・会期中のイベント

(作品研究会、ギャラリートーク、ワークショップ等)

・新たな巡回展開催地とコースの検討

・次世代出品者の育成

・二科支部同人以外の一般の応募

巡回展の開催地と回数

京都	73	岡山	31	徳島	2
大阪	88	熊本	11	大分	3
名古屋(東海)	77	長崎	2	門司	1
福岡	70	松山	8	松江	2
宮城	1	小倉	2	都城	2
金沢	13	広島	61	加世田	1
鹿児島	69	宇部	1	新潟	8
仙台	2	鹿屋	1	沖縄	3
鳥取	22	高松	10	佐賀	10
延岡	8	山形	1	青森	1
秋田	3	福島	1	愛媛	1
富山	11	静岡	5	長野	1
高知	1	酒田	1	水戸	2
松本	4	盛岡	3	魚津	5
別府	2	米子	21	(以上46都市)	
福井	4	宮崎	35		



2018年  
第102回二科巡回展  
(広島展)  
ギャラリートーク



1975年 第60回二科巡回展(鹿児島展) 陳列指導スナップ  
東郷青児、吉井淳二、春田安喜子、左奥に文田、右手前作品は北川民次

## 第105回記念二科巡回展 開催地と日程(予定)

東海展	2021年10月5日～	愛知県美術館ギャラリー
大阪展	2021年10月26日～	大阪府立美術館
富山展	2021年11月30日～	富山市民プラザ
京都展	2021年12月7日～	京都市京セラ美術館
広島展	2022年1月(予定)	広島県立美術館県民ギャラリー
鹿児島展	2022年3月6日～	鹿児島県歴史資料センター黎明館
福岡展	2022年3月(予定)	福岡県立美術館

① エスキース スケッチブック クロッキーブック	・視覚的感動 ・現場のスケッチ、漁具や民具等も含む、多角度からの写真資料 ・人物のポーズ(姿勢、テッサン) ・視点の変化、拡大縮小、トリミングにより新たな発想・イメージ ○ 感覚的感動 ・色彩/自然の色彩、人工的色彩・量と空間
② キャンパス (布張り)	・地塗り ・油彩の場合(ハートンシエンナ+ホワイト) ・白キャンの場合(シエツン) ※アクリルもあり ○ 部分的地塗り ・白キャンの場合(ローズマター)
③ 構成(木炭)	エスキースに従い、垂直・水平を基準に構成 平面・立面の関係を探る ・人物による空間構成
④ 着彩(配色) ハケ、筆、ペイン テイングナイフ	色彩の基礎知識を辿りながら、色彩構成 色の重ね、ヴァルル ・絵画空間の構成は?・情感の表現は? 絵を逆さにして見たり、鏡に写して見たりで 気付くことがある。
⑤ 仕上げ (客観的見方)	

◎制作のプロセス

◎制作のコンセプト

「浜の娘」

ゆつたりとした時の流れを感じさせるノスタルジックな田舎の浜辺。海と共に生きる人々の生活風景を背景に、現実を見つめ未来への夢を抱く少女の配置により、自分なりの絵画空間を構築し、「浜」の情感を描く。

## 「落選」が転機に

絵画部常務理事 西 健吉

私の二科展初出品は地元(鹿児島)の美術教師として赴任してから11年目の夏でした。それまでは、学生時代に描いていた抽象画を引きずって描いた作品を地元紙(南日本新聞社)主催の公募展に出品するも2回目で落選!

美術教師の身としてはこの落選はかなり辛いものがあり、落ち込んで創作意欲もなく悶々と過ごしてきました。ところがある日、教え子から釣りに強引に誘われ、翌朝近くの浜に出かけたところ、早朝の浜辺の情景に魅せられ、釣りを忘れるほど心が動ききました。それ以来、方々の浜や漁港の取材を続け、漁夫や村人達とのコミュニケーションも楽しみとなつていきました。そして北薩の漁港を取材中に、赤いタンクトップと白いショートパンツ姿で自転車に乗った女の子が現れたのです。船大工の父親に弁当を届けにやってくる、笑顔でスケッチブックを覗いた中学生の女の子の潑刺とした姿に、未来への夢を感じ、私もまた創作への意欲が増し、「浜の娘」シリーズへの一歩となりました。

私は最近健康のためにと家の近くを散歩します。割合自然に恵まれた田舎で、ゆったりとした気分、思考の流れをためて眺めてみると、山の木々や川の流れ、草花が息をのむほど美しく見えます。「ソロモンの栄華も野の百合の装いにおよばない」という聖書のことばがありますが、ほんとうに自然の美は、あらゆる人工の美を超越していると感じます。

この何年間か私の創っているものとなる、自然の美とならべて横に置けるような、自然の美とは異なる新しい美になつていないことに気づきます。人間には、自然の中にはない違った美を創造する可能性が与えられていて、画家はそれでもそう信じ、その前提で創作に携わっています。だからいろいろな実験を試みつつ新しさを追求しているとも言えます。新しい範疇の美、形があつて形でなく、線であつて線でない、色であつて色でもない、感じることを表している。絵画にはならないような、私の言おうとしている美は、説明はできないのですが美であると同時に真でもあり善でもあるような、普遍的な美がもしあればいい。それは単なる画才や知的な探求によって可能となるようなものではなく、人が、どれだけ自分の内部にある(多分宇宙から与えられた)美をキヤッチ出来るのかという、人間の内面の問題と関係しているように感じます。

以下は私の独白です。

―日々の積み重ねの中、現そう現そうとする。それが何であれ創意工夫のうえ強い熱意があれば必ずと現れて来るもの、努力、失敗は中途で諦めただけのこと。完成も人それぞれに違いはあれ、その時点で結果。

―時には壊すことで見えてくるものもある。

―作品は七割位まで技術。日々技術を磨く。その上に少しの夢を載せる。職人との違い。夢こそ大切に創ることが楽しくなければ続かない。

―材料について私の場合、画布に油絵の具だけでなく、布片、木片、和紙、顔料、染料、インク、アクリル等、道具も自分の表現に応じて作る。

―色彩について、赤や緑や青といった色も色そのものが動かない実体として存在しているわけではなく、光があたり、物の波長や周波数によりさまざまに色認識される。私は感じる色を作り、さかす繰り返しの日々です。全ては自然の中にある。

今、思うこと、見えない物こそ大切、芸術は感覚の表現、清純に受けとる。

芸術そのものが生や死や他の問題を解決することにつながらなくとも、宇宙規模での困難な現実をこえて、人と人との心をつなげる美の優位を信じようと思います。自然を見つめ、まなびつ…。

## 二科会の義援活動



## 子ども達と未来への希望をテーマとした大画面制作。

私は、大学の附属小学校の校長経験がある。気重だったこの仕事は、私の不安に反し、日々、子ども達から大きな元気をもらうというものとなった。

しかし、今回の義援活動は東日本大震災という、私達でも経験の無い災害。大きな不安、トラウマを抱えた子ども達に、元氣と希望をという使命がある。どのような声掛けをし、何を聴き、何をほめてあげることが出来るのか、自問自答、悩みつつの対面であった。

子ども達と未来への希望をテーマとした体育館の床いっぱいの大作。

活動に参加した絵画部の理事の先生方の優しさ溢れる声掛け、絵画指導に、児童・生徒達は次第に、未来へと想いをのせ、本来の満帆のエネルギーを発揮してくれるようになった。

グループでの協力、美しい色を使う、無心で身体を、筆を動かす作業は、少なからず子ども達の心に、光と希望の灯をともしたのではないかと信じている。

(彫刻部 理事 登坂秀雄)



阿蘇と制作スケッチ  
義援担当理事  
故 宮村 長

2018年 第103回二科展展示  
「大好きなふるさと、西原村の四季  
—熊本の復旧・復興を願って—」  
熊本県阿蘇郡西原村立山西小学校

## 発見し行動する

赤い巨大エネルギーが、24時間眠らず、人や機械を突き動かしている大都会とは対照的に、多くの種類の樹木や植物・動物・昆虫などに囲まれた森の都会が私の制作舞台だ。

限界集落の里山に眼を漂わせてみると、やがてすべては朽ち果てて土に戻っていく美しさと、そこから浄化されて再生してゆく愛しさを目の当たりにする。里山は、生と死のつながらる所でもあり、魂の帰ってくる場所でもあることを知らされる。土を掘り起して耕し、畝を立て、種を蒔き、やがて育つて実をつける。一連の農作業は、大地をキャンパスに見立てた私の地上絵でもある。

経験してきたことと里山風景が同化して、私の表現活動のテーマである伝言と死生観とが本当の自分を生きることによって結びついていくのです。

絵を描くことが好きだった幼少の頃、落書きは、蔵の漆喰の白壁とモザイクのように区切られたなまこ壁に、動物や飛行機やマンガなど自由自在に線を走らせていた。私にとってしつとりとした壁の蔵は、無駄という道草の時間が溢れていたワンダーランドだった。

驚いたことに半世紀後に、イタリアのトスカナ半島の丘の小さな教会を訪れた際に、ふと触れた内壁は、子供の頃に触れていた土蔵の漆喰のものであり、東洋と西洋の共通の材質に深い喜びを感じ、フレスコ画へ突き進んでいった。漆喰の白は無を表すとともに、他の材質の白にはない、透き通るような呼吸する白であり、存在の確実性と不確実性を併せ持ち、無限の広がりを与えてくれる色彩でもある。イズム(主義)の抽象でも具象でもない有機的な抽象絵画表現に、この出会いから15年間取り組んで来ました。

誰もが自分の身の回りに、制作上のヒントが隠れていることに気付かずに、遠くを見ようとしてしまう。普段見ている庭風景も、二階から見ると、別のイメージが湧いてくるように、平凡な発想でも何度でも追究していくことにより、新鮮な作品となる。最初から出来上がった作品イメージを追って、前へ進めなくなる。自由に挑戦して、その中から新しい発見をしていく過程が一番大切であり、試みが成功するか失敗するかに怯えずに、その積み重ねから、自分らしい作品が表現されてくる。

常に発見し行動し、何かを求めていく制作態度を持つことにより、創造的な自分となり、古い殻から脱却できる。

今制作している自分の作品に、新しい美が、生み出されていると、信じていることです。

## 表現したいものと技術

最近の公募展等の出品作を見ると、コンピュータを使って画像を組み合わせたり、色調を変えたり、変形させたり、画面の効果を簡単に手に入れて、それを生かして作画していると感じるものが多くなりました。それはそれで羨ましくさえあるのですが、そこには大きな落とし穴が潜んでいるようにも感じられます。絵をやること、巧く見せることに傾き過ぎて、大切な中身がすっぽりと抜け落ちてしまっている危険性を感じる場合があります。

では、その中身とは何か、第99回二科展に出品した私の作品「欠伸している神様の圖」で語ってみたいと思います。この作品は、東日本大震災のあとに描いたものですが、画面の下の方に傾きかけた街を描き、その上に大きな欠伸をしている神様を描いた作品です。「欠伸をしている(油断している)間に、大惨事が起こってしまつて多くの大切な命が奪われてしまった」とも解釈できますが、「このような大惨事が起こっているのに、神様は平気で欠伸をしている」と解釈することもできます。はたまた「それが神様の悪意」とも捉える人もいるかも知れません。しかし、この作品のタイトルは、「欠伸している神様の圖」だけに留まっています。

ところが、この作品タイトルに英訳を付ける時、どのように表現していいか判断とせませんでした。同じ職場のアメリカ人に相談をして、この作品についていろいろデスカッションしました。そして選んだのが、「A God Indifferent to people's suffering」でした。その時自分は表現したかったこと、何となく漠然としていたものが、はっきりしたのです。神様と言われるような統一された基準のようなものが壊れ去って、混沌とした多様化した価値、それによる虚無感、孤独のようなものを、私はこの作品に表現していたのです。

この経験から、作品を描く時、私は、アイデアスケッチだけでなく多くのメモを取るようになりました。それは、日記のようなもので、自分に対する問いかけ、自分との対話のようなものです。語ることで、文字にすることで、表現したいことが、明瞭になったり、深まったりするのです。私は、この過程こそが、中身であつて、巧みだったりではなく、いい絵を描くうえで、一番大切なことだと思つてはいるのです。

「上手い」とか「下手」とかつまらない基準とは別に、表現したいものと技術とが、都合よく握手をされていて、作家の個性が最適な技術と渾然一体となつて、見る人が自然にため息が出るほどに成熟している作家に、自分は自分なりに、この神業のような到達点に一步でも近づきたいと考えています。

## 絵画の力

第100回記念二科熊本巡回展開催時に遡るが、終盤に入り日増しに観覧者が多くなり盛り上がりを楽しみにしていた夜のこと、突然、震度7の物凄い地震があり、数分ごとに揺れが続いた。翌日の早朝、会場で展示していた作品を外し、近くの倉庫へ皆で移動した。そこで状況判断し中止することを決定した。その二日目の早朝、前回よりはるかに強い震度7強の地震が熊本を襲った、それは莫大な被害をもたらしたのである。作品が一番多かった天井の高い4階の展示室は、天井が壊れ落ち床が見えない程に落下物が降り積もり、屋根の鉄骨の間から青空が見えスポットライトがぶら下がり、現実とは思えない光景でした。作品は、倉庫に移動していた為、被害はほとんどなかった。その時の凄惨な状況と希望の太陽光を取り入れ、私は、作品として記録し残している。

公益社団法人二科会は、展覧会は勿論のこと、芸術活動を通して社会への義援活動及び支援活動等でも貢献していることは、既にご承知の事と思います。先に書いた熊本地震の中でも、阿蘇山外輪山の麓である熊本県阿蘇郡西原村は、壊滅的な被害を受けた場所です。特に、子供たちの心身への影響を考えると、会として何かできないかと考えた。子供たちの心のケアに少しでも役に立つこととして、子供たちと一緒に楽しく絵を描くこと、絵を通して応援していかうと決定し実行した。対象は、西原村立山西小学校の6年生46名、二科会指導者は、西健吉、宮村長、木戸征郎、馬場一郎、田浦哲也、瑠珠世、そして熊本支部同人の有志であった。

制作の関係上、子供たちを4つの班に分け共同で制作する方法をとった。春夏秋冬の四季をテーマに100号を4枚、それを組み合わせて400号の大作とした。西原村の四季折々の美しい自然や生き物・伝統行事などをテーマにした「大好きなふるさと、西原村の四季」と題した力強い大作を皆が協力し完成させた。そこには、自分たちが愛する村の復旧・復興に向けた新しい決意が感じられた。完成した作品は、東京の国立新美術館で開催した、第103回二科展会場に特別展示され、多くの方に感動を与えることとなった。終了後は西原村立山西小学校の玄関正面壁面に、制作に参加した子供たちの卒業記念作品として、堂々と展示されている。それは在校生をはじめ訪れた多くの方々に、明るい希望と生きる強い力を与えてくれるであろうと信じている。

二科会は、単に美術文化の場として二科展を開くだけでなく、美術を通して微力ではあるが希望や子供たちの未来に種をまくことも大切なことだと考えている。私も世の中の状況や環境に対し、常に心にセンサーを持ち新理事として二科会とともに歩んでいきたいと考えている。



2012年 第97回二科展展示「未来の夢のまち がんばろう福島」  
福島県南相馬市立石神第二小学校

## 二科展に出品しよう！

絵画部 新理事 塙 珠世

人生には一人一人のドラマがあるように二科展にも記録と記憶に残るドラマがあります。東京・大阪・福岡で開催された「伝説の洋画家たち二科100年展」は先達の代表的な作品で、しかもそれは二科展に出品した中から選ばれ、出品リストが作成されました。

作家の残した命：すなわち作品は正に「虎は死して皮を留め人は死して名を残す」という言葉の如く、この国の文化の証として各地に残されています。その文化の証をキュレーターとともに調査し、大切に二科展の名のもとに再結集され、後進の私たちが多くの鑑賞者の眼に絶えることのない命を焼き付けました。当時の先達たちは、誰も自らが没したのち、100年後に感動を与えているとは微塵も思ひの中にはなかったことでしょう。命という限りある時間、そこに全霊が注がれた自らの分身、それが作品—命—である、命は永遠であると感じました。先達の作品が再結集された展示と同時期に、今に生きる我々も…。

そう、私たちも第100回記念二科展会場に、我々の命の分身が集まった！それは伝統ある二科展の1ページとなりました。その1ページの中から、150：200回へと続く二科展で私たちの後進たちがセレクトする作品があるかもしれない。私たちの命は続くのです。その1ページに加わる新しい息吹を私たちは待っています。

私は絵描きです…絵描きとしてのこの上ない喜びは、個展、グループ展の展示会場で私の分身である絵を通して、人のやさしい心に触れ、人の命について、時の大切さについて考えを深めることができることです。

二科会という名のもとで熱い命が交錯し、当時の先達のその想いはDNAとして引き継がれ、結集し、離れ、そして大きくなってきた二科会。門戸は広く、離れる者には温かく背中を押してきました。「芸術家は広いフィールドを求め続け、時代が変われば芸術家も変わっていく…」先達の言葉は今も変わらず生き続けています。新しい試みを率先して認め、時代に先んじてチャレンジしてきた二科会は在野の任意団体として立ち上げられ、社団法人として公益社団法人へと変遷してきました。大きな組織になりましたが、会員、出品者の声を反映し変化してきました。審査は、会員1年目も在籍50年の会員も同じ一票を持つ審査員として、公明正大に行われています。

2011年3月11日。大震災による尊い命の犠牲に心を痛めました。美術団体として何ができ



2013年9月 制作風景



2014年 宮城の四季 制作風景

## もう10年、まだ10年

二科福島支部長 須田美紀子

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故の1カ月後、2011年4月「絵画制作で被災地の子供達の力になりたい」と二科会が支援活動を発足した。

第一回目の活動として福島県南相馬市に入った。あれから約10年。子供達は大きく大きく成長した。

今年、南相馬市から東北大学に合格したAさんは、2012年7月の第二回目の支援活動で「未来の夢のまち」を制作した小学5年生でした。彼女はあの時の共同制作の体験で夢に向かって頑張る大切さを教わったと話す。

2020年10月、世の中は新型コロナウイルスの渦の中。学校環境もあの時と似ている。

二科会はこの約10年間、支援活動を通して色々な事を学んだ。この複雑な時代を乗り越え、未来に向かう子供達のため、二科会支援活動はさらなるバージョンアップをし、芸術の力で子供達の夢を作るきっかけとなれる事を信じ歩んでおります。



須田福島支部長とAさん 近影



2011年9月・第96回二科展会場

るのか、「アートによる心のケアを」と義援活動チームが即結成されましたが、心の大きな痛みに対し私たちの力は微力でした。それでも現地の体育館で被災地の子供たちと大きな絵を描き、「この大きな絵は10万人の来館者が訪れる二科展で私たちの作品と一緒に展示されますよ！」その言葉に大きな歓声が響き、9月の二科展会場での再会は命と命の触れ合いと感動で心が熱くなりました。

みなさん！ 待っています！

私たちと一緒に二科展の1ページを作りましょう！！

# 二科105年の歴史と日本近現代美術史を彩る作家たち

■二科展の第一歩！  
二科会はここから始まりました。



第1回展 上野竹の台陳列館会場風景



第1回展ポスター



第2回展 鑑別風景

●二科会は1914年に新しい美術を標榜し、石井柏亭、梅原龍三郎、坂本繁二郎らにより設立されて以来、関東大震災、第二次世界大戦、東日本大震災等様々な困難を乗り越えてきました。戦前には印象主義、フォービズム、キュビズム、エコール・ド・パリ、シュールレアリスム、社会主義リアリズム、抽象芸術等欧州の美術潮流に敏感に感応・連動し、前衛的な作品を展示するべく九室会も生まれました。戦後もアンフォルメル・スーパーリアリズム、ポップアート、ニュー・インペインティング等現代美術とも連動しつつ、堅実な写実の伝統も生き続け、日本の近現代美術史の主流となり、一流一派にとられない表現を会の柱とし美術界を牽引してきました。そして今、コロナ危機に直面しながらも二科会は第105回記念二科展の開催に向けて力強く前を向いて歩み続けております。このような時だからこそ一世紀の輝かしい歴史を振り返りつつ、新たな二科を継承、創生して参りましょう。

- 1914 第1回展 上野竹の台陳列館
- 1919 第6回展 彫刻部 藤川勇三により設立
- 1923 第10回展 関東大震災により東京展中止 京都・大阪・福岡で開催
- 1933 第20回展 東京府美術館(第13回より)
- 1938 第25回展 九室会発足



東郷青児と藤田嗣治 1940年(昭和15年)

- 1943 第30回 東京府美術館
- 1944 第二次世界大戦により、やむなく二科会の解散を余儀なくされる

## ■戦後の二科再興はここから

- 1946 第31回二科展 東京都美術館
- 1955 第40回二科展 東京都美術館
- 1951 二科会商業部設立(54年にデザイン部)
- 1953 二科会写真部設立
- 1965 第50回二科展 東京都美術館 50周年記念回顧展 東京ステーションビル
- 1975 第60回二科展 東京都美術館(改築) 第57回より上野の森美術館でも併催
- 1979 社団法人化
- 1985 第70回二科展 東京都美術館・上野の森美術館 70周年二科回顧展 東京・名古屋・大阪
- 1995 第80回二科展 東京都美術館・上野の森美術館 第80回記念二科回顧展 東京・大阪
- 2005 第90回二科展 東京都美術館・上野の森美術館 第90回記念二科黄金の時代展

この時期に巨匠たちも二科会に参加。



安井曾太郎《金蓉》



藤川勇三 《マドモアゼル・シュザンヌ》



佐伯祐三《煉瓦焼き場》



ジョルジュ・ブラック《壺と葡萄と林檎》



パブロ・ピカソ《静物》

二科展に展示された  
海外の巨匠たち



アンリ・マティス《窓際の女》



オシップ・ザッキン《母子》



坂本繁二郎《帽子を持てる女》



古賀春江《海》

前衛たらんとする  
九室会発足



九室会 発会式



山口長男《地形》



吉原治良《作品1》



大沢昌助《褐色の像》

東郷青児会長——美術の大衆化



第39回展 前夜祭のにぎわい



第53回展 旧東京都美術館に並ぶ行列

吉井淳二理事長——二科会を法人化



第76回展 審査風景

■戦後の主な海外交流史(抜粋)  
二科会の国際化

- 1959 フランス サロン・ド・コンパレゾンとの交換展 パリ国立美術館
- 1960 第45回展で
- 1961 二科メキシコ展開催
- 1963 メキシコ現代作家作品55点展示
- 1967 サロン・ドートンヌに56名出品 (同'71・'76・'85・'86・'94)
- 1968 コペンハーゲンにて31点展示
- 1970 リスボンにて48点展示
- 1972 エジプト・レバノン絵画・彫刻作家作品 92点展示
- 1975 エジプトにて二科展開催
- 1976 アルジェリア、パリにて二科展開催
- 1977 スペイン作家作品展示
- 1982 ブルガリア作家作品53点展示
- 1984 ブルガリア現代作家作品展示(同88)
- 1987 ブルガリア二科展をソフィアにて開催
- 1997 メキシコ現代作家作品展示
- 1998 ポルトガル現代作家作品展示
- 1999 メキシコ・オアハカにて展示
- 2000 ポルトガルにて展示
- 2001 タイ作家作品展示
- 2003 ハワイ作家作品展示
- 2004 日米交流150周年記念 ニューヨーク・ハワイ二科選抜作家展開催
- 2008 ベトナム作家作品展示
- 2019 ウクライナ作家作品展示

■100周年を迎える国立新美術館時代  
—新生二科—

- 2007 第92回二科展 国立新美術館へ移転
- 2012 公益社団法人化
- 2015 第100回二科展 国立新美術館 伝説の洋画家たち 二科100年展



伝説の洋画家たち 二科100年展 開会式 第100回展 テープカット



第100回展 パレード

■そして第105回記念二科展へ

石井柏亭の理念(創設者の一人)

二科会は二科会であって誰のものでもない。  
二科会は公器である。

公器であるこれからの二科会を作るのは、  
一人一人の出品者です。

海外交流展示



1967年 サロン・ドートンヌ会場にて



2004年 二科ニューヨーク会場



1976年 グラン・パレに掲げられた二科会の看板



2019年 ウクライナ作家作品展示



1988年 ブルガリア二科展 オープニングセレモニー



2003年 ハワイ招待作家作品展示

戦後活躍した作家



笠置季男《マーキュリー》

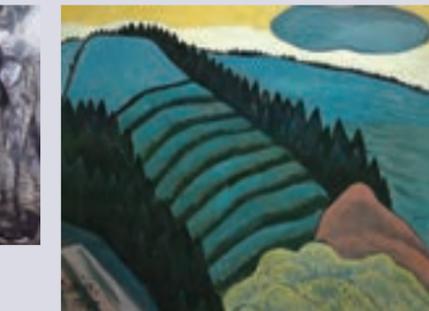


岡本太郎《二人》

歴代二科会代表の作品



第57回展《女体礼賛》  
東郷青児 (就任期間：1961~1979)



第62回展《風景》  
北川民次 (就任期間：1978)



第70回展《村の休憩所》  
吉井淳二 (就任期間：1979~1998)



第70回展《若いキリン・堅い土》  
淀井敏夫 (就任期間：1998~2000)



第70回展《舞う》  
鶴岡義雄 (就任期間：2000~2006)



第70回展《銀座》  
織田廣喜 (就任期間：2006~2012)



第99回展《湖畔夕照》  
田中良 (就任期間：2012~)

二科100年

二科100周年委員会委員長 吉野 毅  
100周年委員会が設置されたのは2009年12月の理事会であった。当初通常の会費以外に会員・会友から特別会費を徴収すべきとの提案もあったが、委員会としては身の丈に合った100周年を実現したいとの意向を示し、理事会に了解された。また100周年史の執筆は瀧梯三氏(二科70年史執筆)に依頼することを了解されたのである。

委員会には100周年の共催を求め大手の新聞社を回ったが、各社とも、展覧会そのものには興味を示すものの予算がないとの理由で辞退されてしまった。その時手を挙げてくれたのが、産経新聞社であった。産経新聞社は二科70回、80回、90回の回顧展を主催した実績があったのである。「伝説の洋画家たち 二科100年展」は日本近代美術史を彩る作家たちの二科展出品作で構成された展覧会であり、歴史ある二科会ゆえに実現できたのである。  
二科100周年事業をあらゆる面から精査し成功に導いた事務局に心から敬意を表したい。

二科展・世紀を越えて

絵画部常務理事 生方純一

第100回記念二科展は上野の都美術館から現在の国立新美術館に移って間もなく、会員・会友・出品者ともに高揚した気持ちで迎えることが出来ました。

特別展示、回顧展、記念史、記念講演、記念祝賀会など第100回記念展は大いに盛り上がり、出品者、入場者も多く、会場も大盛況でした。当時の大きな改革として絵画部では全会員による賞、推挙など公平な審査を実施し、また、役員選挙なども全会員の投票とするなど改革が進みました。

2020年は、ご存知のようにコロナ禍で延期を余儀なくされました。二科展に限らず他の展覧会やオリンピック&パラリンピック、芸能関係の公演、花火大会などにも影響が出て日本中が意気消沈しましたが、今は大きなジャンプのために身を低くして、来たる日を期して力を磨める時と考えています。

試験を糧にさらに充実した二科展を、役員一丸となって準備しています。

◆戦後トピックス—

天皇・皇后(現 上皇・上皇后)両陛下 二科展で鑑賞



第81回展 1996年



第54回展 1969年(皇太子時代)



## 二科会 お問合せ先一覧

二科会本部 TEL：03-3354-6646(埜事務局長)	北陸(石川・福井)支部 TEL：076-229-2939(粕谷)
北海道支部 TEL：011-882-2954(飯田)	富山支部 TEL：0763-64-2637(柳田)
青森支部 TEL：017-721-5622(木村)	東海(愛知・三重・岐阜)支部 TEL：080-3258-4515(三後)
秋田支部 TEL：090-9031-3591(石黒)	京滋(京都・滋賀)支部 TEL：090-8375-5779(入佐)
岩手支部 TEL：0193-25-0241(佐々木)	関西(大阪・兵庫・奈良・和歌山)支部 TEL：090-7753-1611(尾崎)
山形支部 TEL：090-9960-7177(町田)	鳥取支部 TEL：0857-23-2477(木下)
宮城支部 TEL：090-2993-8008(及川)	広島支部 TEL：090-7138-0189(高松)
福島支部 TEL：080-5577-3716(須田)	愛媛支部 TEL：089-926-2768(黒川)
群馬支部 TEL：090-7282-7120(井田)	高知支部 TEL：090-2890-5892(徳弘)
茨城支部 TEL：090-8114-7381(山中)	香川支部 TEL：087-867-7297(町川)
埼玉支部 TEL：048-296-1275(山下)	福岡支部 TEL：090-5295-2058(田浦)
千葉支部 TEL：090-4169-6576(皆川)	大分支部 TEL：0972-46-1343(加藤)
東京支部 TEL：090-7006-0792(森岡)	佐賀支部 TEL：0952-29-4708(山崎)
神奈川支部 TEL：042-784-2324(吉田)	長崎支部 TEL：090-4512-5468(山下)
新潟支部 TEL：090-5782-3099(村山)	熊本支部 TEL：090-7387-4664(木戸)
長野支部 TEL：090-4158-2941(横前)	宮崎支部 TEL：0985-25-1358(森山)
山梨支部 TEL：0551-32-3661(矢野)	鹿児島支部 TEL：090-1927-6006(前田)
静岡支部 TEL：0545-71-0258(石倉)	沖縄支部 TEL：090-1083-3965(西村)

## 二科会協賛業者一覧 ◎搬入・搬出についてお問合せ先

二科展推薦搬入取扱業者一覧
*彩美堂(株)上野店(事務連絡先) 〒110-0015 東京都台東区東上野4-1-9-1F TEL：03-5827-5155
*彩美堂(株)足立営業所(荷受先) 〒121-0062 東京都足立区南花畑4-33-7 TEL：03-5242-3701
*彩美堂(株)広島支店 〒733-0006 広島県広島市西区三篠北町3-48 TEL：082-237-1012
*ヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株) 東京美術品公募展支店 〒135-0062 東京都江東区東雲2-2-3 東雲ビル2F TEL：03-3529-0838
*ヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株) 関東以外の方は下記ホームページをご覧ください。 [ <a href="https://www.y-logi.com/service/art/jigyosho.php">https://www.y-logi.com/service/art/jigyosho.php</a> ]
* (株)ハート・アンド・アート東京営業所：全国 〒135-0053 東京都江東区辰巳2-4-4 TND潮見センター5F TEL：03-6457-0961
* (株)ハート・アンド・アート大阪営業所 〒559-0024 大阪府大阪市住之江区新北島8-1-32 TEL：06-6683-9650
* (株)アートライン東京 〒123-0862 東京都足立区皿沼1-12-15 TEL：03-5691-1141
* (有)アートン 〒252-0821 神奈川県藤沢市用田211-4 TEL：0466-48-8488 HP[ <a href="https://www.arton.events">https://www.arton.events</a> ]
* (有)アートワークス 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-5-44 TEL：029-302-8123 (担当：北田)
* (株)東美本社(首都圏受付センター・地方着荷所) 〒151-0071 東京都渋谷区本町5-30-12 TEL：03-3376-8148
* トータスマイアートクラブ 〒352-0015 埼玉県新座市池田3-3-2 フリーダイヤル0120-277-812
* マツモト額縁店 〒241-0813 神奈川県横浜市旭区今宿町2569-128 TEL：045-442-8278
* アトリエ モネ 〒227-0031 神奈川県横浜市青葉区寺家町353-2 TEL：045-530-3993 (携帯090-7717-2125)
* (株)トータル・アート・サービス HIGUCHI 〒179-0073 東京都練馬区田柄5-7-2 TEL：03-6763-5750 ※彫刻部門のみ
☆なお、上記二科展推薦搬入業者以外の取扱店搬入や、個人の直接搬入もできます。

地域支部単位の公募、展覧会もあります。また、本展に向け作品搬入(取次業者含む)、制作指導のご相談、そして彫刻部についてのお問い合わせは、二科会本部までお願いいたします。

### 編集後記

二科展はコロナ禍のために開けませんでした。こんな時だからこそ、未来に向かう熱い想いと二科会の歴史を振り返る事が大切だと感じています。共に歩く仲間、新しき仲間へ創作に向かう気持ちに寄り添えればと思います。創刊号にご尽力いただきました多くの皆様に感謝申しあげます。

広報担当 菅原二郎

---

### 広報二科

令和二年一〇月二六日発行  
発行所…公益社団法人二科会  
〒二六〇〇〇三 東京都新宿区新宿四三二一五  
レイフット新宿五〇一号室  
電話：〇三三三三五四一六四六  
FAX：〇三三三三五四一七八八  
電子メール：nka@nka.or.jp

発行人…田中 良  
編集…菅原二郎・埜 珠世  
印刷…ニューカラー写真印刷

©公益社団法人二科会 2020



<https://www.nika.or.jp/home/index.html>